旧制松江高等学校教師

カルシュの足跡を追って

◇28◇

若松　秀俊

厳格で猛烈な会話訓練

ドイツ語の授業（中）

前回のような見方もあったが、五期理乙の酒井勝郎はプラーゲの授業や小言の様子をリアルに描写している。松江高校の理科に入学すると毎週、一回一時間のドイツ語会話の授業があって、その先生がプラーゲだった。この先生は始業のベルが鳴ると、パッと教室へ飛び込んで来る。五分程度遅れて来る先生がほとんどなので、ベルの音を外で聞いて悠々と入っていくと、ニッとひと睨（にら）みして、閻魔帳に遅刻のマークをする。

さて授業だが、これがまた大変。ドイツ語に初対面で、まだアー・ベー・ツェー程度を修業中の最初の時間に、いきなり黒板に大きく文章を書いた。それも今まで見たことのないものだ。後で聞くとドイツ文字の古書体だったそうだが、これを一字ずつ指して読めと言った。無理だ、読めるわけがない、と思っている暇もなく、どんどん全員に当てていく。

この先生は当てるのに決まった順を踏んでいった。教室で着席最前列の右から左へ順に、一人もせていると、指名は次へ移る。そして、みるみるうちに、全員に行きわたった。

「どうなることか？」と思ったのだが、やがて「なーんだ！」と思うことがあった。というのは、昨年入学して留年したクラスメートによって、問題の文のアルファベートが一字ずつ読まれ、文章全体が、「ダス　イスト　アイン　ティッシュ」（これは一脚の机である）ということだったからだ。それがみんなに分かったのは、三十人の全員に指名が三、四回に到達した始業四十分過ぎであった。

最初はこれくらいで済んだのだが、次の授業からはもっと厳しい。一度教わったことを忘れて返事ができず、ヘドモドしていると、「ダメ、ダメ」というはっきりした日本語の叱声（しっせい）が飛んで来る。そして黒い表紙の閻魔帳に何やら記入するのだが、これが度重なるとひどい。

「お前のような者は、この学校へ入ってくる必要はない。家に帰って田の草取りでも手伝った方がいい。今、農家は忙しいのだ」というようなありさまであった。

噂（うわさ）によるとこの先生は、青島（チンタオ）でドイツ軍の日本語通訳をしていたのだが、青島陥落で捕虜になったとのことだった。

ところである時、出雲を代表する神様の話になって、「ヨーロッパには神様が一つしかない。日本には、大黒様、恵比寿様、弁天様、稲荷様それにお釈迦様まであって人々が拝む。これを多神教といって、野蛮国ではそうである」と大真面目に言った。これを聞いて憤然としたのが、「長崎の鐘」で知られる若き日の永井隆であった。しかし、直接この憤懣（まん）を先生にぶつける言葉を知らず、みんなに向けてもらしたのは「日本を馬鹿にしている。ギリシャには神様がたくさんあるのに…」ということであった。

プラーゲの言葉は日本人の自尊心を逆なでするものだったが、もともと彼らはヨーロッパの学問を志してこの学校へ入って来たので、こんなことでは怒れなかった。猛烈な会話訓練だって、彼らの将来を思っての、この人のサービス精神の発露なのだろう。ひょっとしたら、自分たちが志向してるドイツ文化の魂が、こんなところにむき出しにされているのかもしれないと思ったものだ。この先生は好かれてはいなくても、会話訓練の辛さを理由に嫌がられることはなかった。

誰かが教室で、突然大声を上げた。ドイツ語の字引を見て、大発見をしたというのだ。「あった、あった。ドイツ語にプラーゲンという動詞があって、日本語では『苦しめる』とか『いじめる』という意味なんだ」というわけだった。

「ああ楽しい、我らともがら」松江高校校舎から

（東京医科歯科大学大学院教授）

＝文中敬称略＝